

ツォンカパ思想の形成過程

福 田 洋 一

はじめに

今ご紹介にあずかりました福田でございます。このコロナ禍という非常事態の中で、このような機会を設けていただき、感謝しております。それにお応えするべく、私のこれまでの研究の全てということはできませんが、先ほど箕浦先生からご紹介いただいたツォンカパの研究の総まとめをしながら、もう一步先を見据えるお話をさせていただければと存じます。というわけで、少々専門的なお話になるかもしれませんが、最後のこの機会に、まだ十分な研究は進んでいませんが、現在の私のこれまでの研究からこのように予想できるのではないかと、あるいは、それを埋めるべく、今後の研究をどなたかに引き継いでもらえたら、そういう思いを込めて今日の講義をさせていただければと存じます。

本日のテーマは、「ツォンカパ思想の形成過程」、すなわち、ツォンカパの中観思想・道次第思想・密教思想、これらの思想が、それぞれどのように形成されたのか、というプロセスに、できるだけ肉薄してみたいと考えております。中観思想・道次第・密教思想と言いますが、その内容は非常に広いわけですが、これらがツォンカパの全仏教思

想の根本的な課題であったということに関しては、専門家の皆さんにも異論のないところであろうかと思えます。

中観思想については、ツォンカパは、中観帰謬論証派という中観の一派が最も優れた中観思想であり、中観思想の祖であるナーガルジュナの思想を最も確に解釈していると考え、この思想を究めたいというのが、生涯をかけての最重要課題であったと考えられます。

それから、道次第と言うのはもう少し現代的に申しますと、「悟りへの道の階梯」、英語の方が分かりやすいと思いますが、*Stages of the Path to the Enlightenment*、訳せばその通りになりますが、この中の Stage とは、階梯、階段のようなもの、あるいは段階ですね。要するに悟りに向かう道には徐々に上がっていく諸段階がある。その段階をどのように進んで行ったらよいのか、あるいは、悟りに向かう道はどのような段階の体系として構成されているのか、そういったことについてのチベット仏教の解釈があります。これを今後簡単に「道次第」と呼びたいと思います。これは一世紀初頭にインド仏教の高僧であるアティシャがチベットにやって来て伝えた思想を、弟子たちがカダム派という宗派を作って伝えたものです。カダム派由来の道次第は、全チベット仏教に影響を与えて、チベット仏教の顕教は、全て道次第思想と言うことができます。宗派によって細かい解釈は異なりますが、諸段階を経て悟りに向かう、という考え方は大体一致している、というくらいにチベット仏教全体を形作る大きな流れとなっております。

また、密教思想は、チベット仏教において比重が非常に重いものです。ツォンカパの著作でも三分の二くらいは密教に関する著作となっております。単に密教思想というだけでは、範囲が広くなりすぎますが、ここで問題にしたいのはゲルク派の密教の根本聖典である『秘密集会タントラ』の中に説かれる究竟次第、これについては後程もう一度説明しますが、仏になる一番最後の段階です。この次第というのも、「道次第」の「次第」と一緒ですが、そういった諸段階の解釈がツォンカパにとって非常に重要な意味を持っていました。

ということ、この三つの思想がツォンカパの中で、いつ頃、どのように、あるいはどういったことを元にしながら

ら、どういったきっかけで生まれてきたかをお話ししたいと思います。それらの思想形成過程におけるパターンのようなものがあります。それぞれにバリエーションはありますが、まず第一に特徴的なのは、ツォンカパは聖文殊（文殊菩薩のこと）の啓示を受けて、聖文殊と直接話をしながら自らの思想を形成していきます。話をしながらというよりは、聖文殊から教えを受けて、それがよく分からない、それを理解していくことによって、自らの思想を形成していくという過程が、三つの思想形成に共通しています。

第二に、チベットの場合師資相承で、先生から弟子へと伝わってくる教えというのがあります。ツォンカパも若い頃に様々な寺院を回って、それらの伝統を学んでいます。しかし、その内容に満足しないというか、聖文殊の教えとの間に矛盾を感じ、それを何とか解決しようとしています。

最後に、師匠から受け継いだチベット仏教の伝統的な内容とは異なる聖文殊の教えを、ツォンカパはインドの原典を精読することによって検証しようとしています。そして、聖文殊に教えられた内容が、インドの原典の内容と一致していることを理解し、決定的な確信に至ります。そういった過程の最後に、仏や過去の祖師たちがツォンカパに加持する神秘的なヴィジョン、あるいは夢とも言われますが、それが現れてきます。これは神秘的というより象徴的と言ったほうがよいのかもしれない。本当にそういったものが現れたのか、ただの夢まぼろしではないか、と我々現代人は考えがちですが、これはツォンカパにとっては全く現実そのものであり、実際に仏や過去の祖師たちが現れて、様々なことをしてくれることを、我々の今見えている現実とは違う次元での現実と考えていただけだと思います。ツォンカパが自らの独自の理解に到達したということは、その後ツォンカパがそれら三つの根本思想についての主著と目される著作を書いたり、同じテーマでの講義が多くなされるようになることで分かります。

1 ツォンカパの思想形成過程の年譜

以上のパターンを中観思想、道次第、密教思想の三つについて具体的に検討していきたいと思えます。まずその前に、今日の話に関係しそうなツォンカパの生涯の時間軸についてざっとまとめてみました。この年表は、青海チベットから来た留学生のラモ・ジヨマさんと共著で書いた論文「ツォンカパ伝における年次と四季の確定」を基にしています。ツォンカパは、この時代のチベット人にとっては珍しいことに、ほぼ毎年の、しかも春夏秋冬に、どの地方のどのお寺に行つて、誰に何を聞いたあるいは何を教えたか、どついつ著作を書いたか、などのことが、ケードウブジェという優れた直弟子たちによって記録されています。この伝記に基づいて我々はこのツォンカパの年ごとの、あるいは一年の中の季節ごとの動きを推定することができます。

- 一三五七年　　・『青海のツォンカに誕生。
- 一三七二年（一六歳）：中央チベットに移つて勉学を始める。
- 一三九〇年（三四歳）：ラマ・ウマバと出逢つ。
- 一三九五年（三九歳）：ドルンパの『教説次第大論』を読む。
- 一三九七年（四一歳）：ブツダパーリタに加持される夢を見る。
- 一四〇一年（四五歳）：アティシヤに加持されるヴィジョンを見る。
 - ・『菩提道次第大論』執筆。
- 一四〇六年（五〇歳）：『善説心髓』『中論註・正理大海』執筆。
- 一四〇九年（五三歳）：ガンデン寺建立。

：マルパの思想を確信した夢を見る。

一四二一年（五五歳）・『五次第を明らかにする灯明』を執筆。

一四二四年（五八歳）・『秘密集会タントラ』註『灯作明』の複註を執筆。

一四一九年（六三歳）：逝去。

ツォンカバが生まれたのが一三五七年、亡くなったのが一四一九年、六三歳です。最初中央チベットに出てきて勉強が始まるのですが、特にエポックメーカーキングな事件は、三四歳の時、一三九〇年にラマ・ウマパという奇妙な僧侶と出会ったことです。この僧侶を、ツォンカパもケードウプジェも、ラマ、すなわち師匠と呼ぶのですが、学識があるわけでもなく、勉強を積んできたわけでもありません。この人は若い頃から文殊の声が聞こえるという人でありました。そしてツォンカバのところに来て、その後一三九二年位までの間に二度ほどツォンカパと一緒に修行します。

最初はラマ・ウマパが聖文殊の言葉を通してツォンカバに伝えていましたが、二度目の修行の間にツォンカバは聖文殊と直接対話できるようになっていきました。これは非常に大きな出来事でした。聖文殊と交信したのだと言つと現代では学術研究として認められないかも知れませんが、チベット人の留学生も「こんなことを言ったら、日本の学会では誰も相手にしてくれないのではないか」と心配してくれたのですが、少なくともこれはツォンカパ自身が自らそのように真剣に考えていたことであります。その弟子たちももちろんそれをそのまま受け取っております。これがどのような事実であったのかは、もはや我々には分かりません。ただ、そこに残された文献の内容をそのまま信じる以外にないのです。信じるというよりは前提にする以外にない。それを前提にしたときにどのようなことが分かってくるのか、という立場で私は研究をしております。とにかく、聖文殊がある種のことば、ある種の思想を伝え、ツォンカバはそれを最初理解できないでいたけれども、そのうちにそれがだんだん理解できるようになって、そこからツォ

ンカパ独自の思想が形成されたという事実は否定することはできません。

次の大きな出来事が三九歳の時、ドルンバの『教説次第大論』を読んだことです。これについては、後でもう一度言及します。そして中観思想の理解の頂点は、四一歳の時、ブツダパーリタの夢を見たことです。ブツダパーリタは後にツオンカパが最重要視する帰謬論証派の最初の祖師です。その夢の中で、ブツダパーリタがツオンカパの頭の上に『中論』の一ページを置いて加持をします。その翌朝、『中論』のその箇所に対するブツダパーリタの注釈を読んだときに、中観思想の奥義を理解したと伝えられています。

次に、ツオンカパ四五歳の時にチベットに道次第思想を伝えたアティシヤを含むカダム派の弟子たちの夢を見ます。その夢から、アティシヤに由来する道次第思想が全てツオンカパに伝承されたことが読み取れます。その直後にツオンカパは最初の名著『菩提道次第大論』を書くこととなります。同じ年ですね。

そして、五三歳の時、カギユ派の祖マルバの夢を見ます。マルバは、アティシヤとは逆に直接インドに向かい、インドの密教行者ナーローパという人に教えを受けてきました。それがナーローの六法（六つの教え）と呼ばれていますが、この教えについての決定的な確信を得ます。これもまた後ほど詳しく検討いたします。そしてそののちに、ツオンカパの密教に関する二つの名著、五五歳の時に書かれた『五次第を明らかにする灯明』と、その三年後に、チャンドラキールティの書いた『秘密集会タントラ』根本タントラの注釈『灯作明』（灯を明らかにする書）に対する複註を著します。原典の著者は中観ではなく密教のチャンドラキールティですが、ツオンカパは中観で帰謬論証派のチャンドラキールティを重視するのと同様、密教においてもチャンドラキールティを重視します。すなわち、五三歳のときマルバの夢でナーローの六法の確信を得た後に、矢継ぎ早に密教の名著を二つ著し、その五年後に逝去することになります。

以上の時間軸を覚えておいていただければと思います。

2 中観思想の形成過程の検討

先ほど申しましたように、ツォンカバ独自の思想の形成過程は、ラマ・ウマバが媒介者・仲介者となって聖文殊と問答をする、あるいは聖文殊に教えを乞うというのが出発点にあります。これは特に中観思想、次には道次第に關係が深い話であります。三四歳の時にラマ・ウマバと会って、三六歳の時に二人で御籠の修行をしている時に、ツォンカバはラマ・ウマバを介さずに、直接聖文殊と話ができるようになります。その段階でラマ・ウマバは東チベットへと戻っていきます。ツォンカバが実際にラマ・ウマバと接触したのはこの二年間ということになります。

その後ツォンカバは一人で、ラマ・ウマバと本尊である聖文殊を一体のものとして祈願をして、そしてその教えを乞う、という方法を通じて聖文殊の教えをずっと聞いていきます。ツォンカバは、教義的なことだけではなく、お寺の復興や仏画の描き方に至るまでの細かい点についてまで聖文殊にお伺いを立てていました。ラマ・ウマバとの出会いは、ラマ・ウマバから何らかの思想的影響を受けるためではなく、ツォンカバが直接聖文殊と対話できるようになるきっかけのようなものであったと考えられます。

中観思想の形成過程は、拙著『ツォンカバ中観思想の研究』（大東出版社、二〇一八年）の第二章「聖文殊の教誡による中観思想の形成過程」において、聖文殊との対話についての伝記的な記述を抜き出し、あるいはそれに関連する小さな著作を一つ一つ検討して、どのような過程で、ツォンカバの理解が發展していったかを推定しました。書簡などの小さい著作には執筆年代が記載されていませんが、内容から、このくらいの年代に、このような順番で書かれたものであろうという推定をしております。以下は、その研究を基にしています。

最初に聖文殊にお話を聞き始めたときにツォンカバが一番関心を持っていたのは、中観思想の真実についての根本的な理解でした。ですから最初は繰り返して、ツォンカバは中観思想について聖文殊に尋ねていました。その時ツォ

ンカバの念頭にあったのは、それまでのチベットで唱えられていた中観思想です。これを「離辺中観説」と名付けた学者もいますが、中観思想の究極の立場は自分で何も判断しないことである、そして全てが無自性であるので、そこには縁起は成り立たない。縁起というのは世俗の世界なので、世俗の世界を踏み台にして勝義の世界、つまり無自性に到達すればそこに一切の縁起はない、という考え方でした。聖文殊はこれを悉く否定します。そうではないと。縁起と空というのは一つのものにおいて同時に、かつ相互補足的に必要なものとして成立している。いずれかが成り立てば、いずれかが否定され、それが段階になっているということはない、ということをつォンカバに繰り返して教えます。教えますけれどもつォンカバは最初理解できません。そこで聖文殊は、理解できないならばちゃんと覚えておいて、自分でインドの原典を精読して考える、もう正しい教えは教えたのだから後は自分で考える、というように突き放してしまいます。それも正しい話で、何もかも教えてもらっても、そんなに簡単に理解できるわけではないです。自分で原典をきちんと読んで、そこで確認できなければ意味がないわけです。このように教えられたと単に書いたのでは、誰も信用してくれないわけです。そういうふうに聖文殊は教えているのです。

このように、一人残されたつォンカバは再び瞑想修行、御籠修行を何度か繰り返していきます。一三九二年にラマ・ウマバが東チベットに帰っていったのち、一三九六年、四〇歳頃までそうだった御籠修行をしながら、インドの原典を読んで考えを深めていきます。そして、ウルカのおデグンギェルのふもとにあるラディンに庵を建てて、そこでラマと本尊を一体のものとして何度も繰り返し熱心に祈願し、原典を精読して思索を積み重ねていたある晩に、夢の中に五人の中観論師が現れてまいります。ナーガールジュナから始まる五人のインドの中観の論師が「自性があるかないか」とかそういったことについて議論している。その中から一人、青い体をした巨体の学僧が立ち上がってきて、「私はブッダパーリタである」と言つて、『中論』のインドの貝葉のあるページをつォンカバの頭の上に載せて加持をしました。そこで夢から覚めたつォンカバは『中論』のそのページについてのブッダパーリタの註を参照します。

そうするとこれまでいろいろと「ああでもない、こうでもない」と考えていた疑問点が一気に解消して、中観についての非常に明晰な理解が得られた、と伝記に書かれております。伝記だけではなく、そうであつたらうと思われるような書簡も残されております。したがってこの「ブツダパーリタの夢」というのは、中観思想についての決定的な理解が得られたことの象徴的な夢となっております。

そこで得られた思想というのは、先ほど申しましたように、空と縁起が同一のものにおいて相互不可欠で、どちらも欠くことができないものとして成り立っている、という思想であり、これが四五歳、つまり五年後に書かれる『菩提道次第大論』の最後の章、毘鉢舍那章と言つのですが、これは非常に重要な章で、それ自体浩瀚な『菩提道次第大論』という最初の主著の後ろの三分の一くらいを、この毘鉢舍那章が占めています。ここでツォンカバは聖文殊の教えから得られた独自の思想を、「聖文殊がこんなことをお説きになった」と一言も言わずに、全てインドの原典を引用しながら論理的にそれを論証し、それ以前の説を細かく論破していきます。以上、中観思想の形成過程を簡単にまとめてきましたが、実は非常にいろいろなことを省略しております。詳しくは私の『ツォンカバ中観思想の研究』第二章を参照いただければと思います。この中観思想の形成過程については、これまである程度研究してきており、原典自体も辿って、同書にその内容を確定しておきましたので、まだ問題は残っているものの、その内容にはそれほど問題は無いのかと思っております。

この内容が「本当にそうだったのか」ということですが、この聖文殊の教えは、ツォンカバより八歳年上の師匠であるサキャ派のレンダワに、その聖文殊の教えを報告する書簡に「聖文殊の教誡によって教えられた」と書いています。このレンダワは、ツォンカバの顕教における最も重要な師であり、二〇歳くらいの頃にツォンカバが尋ねて行って、顕教についての教えを受けました。最初のうちは、ツォンカバがレンダワから教えを受けているのですが、そのうちにツォンカバはレンダワに講義をしたり、と相互に教え合い、あるいはあるテーマについて対等に議論をする

いう関係になってまいります。そのレンダワに宛てた書簡は、年代ははっきり分かりませんが、先ほどのブッダパーリタの夢が一三九六年、その後レンダワがやって来るのが一四〇一年、『菩提道次第大論』を書く二、三年前です。ですから一三九七年から一四〇〇年あたりの書簡であるうと思われまゝ。この中でツォンカバは「聖文殊はこのように仰っている」と聖文殊のことを引用しながら、なおかつ非常に生々しく熱気を込めた書き方で書いた、そういう印象を受けるような手紙になっております。これ全て「仰った」と日本語で言っていますが、「仰る」と言う動詞は「仰っている」と現在形で書かれているんですね。ですから過去に「仰った」ということではなく、仰って「いる」という感じですね。そういうふうになら全部が書かれております。そしてその内容はほとんどが、『菩提道次第大論』の中に認められるような思想ということになってまいります。本当は少し違い、その間に少し変化があるのですが、それは細かい話なので私の著作を読んでいただければと思います。

3 道次第思想の形成過程の検討

では次に道次第の思想形成について見ていきましょう。この道次第思想の形成については、チベットからの留学生、更蔵切主（クンサン・チジョン）さんの博士学位請求論文『菩提道次第大論』におけるカダム派思想の研究 道次第を中心として『（大谷大学、二〇二〇年）が詳しい研究を行っています。本節の内容は、このクンサンさんの研究内容に基づいております。ただ、そのままではなく、クンサンさんの提供した資料に基づきつつ、私なりのアレンジをしながらまとめたものであります。

道次第とは先ほども申しましたように、悟りに向かう道の諸階梯・諸段階と言う意味ですが、カダム派に伝わる道次第の特徴は、そこに三つの仏教修行者の類型が設定されることにあります。一つは輪廻に属するもので、自分は苦しみの中にいる、輪廻は苦であると理解して、少しでも来世で幸福な転生をしたいと願う人であり、これを「小士」

と言います。しかしながら、毎回良いところに転生してもなお、例えば神に転生しても死を免れないのです。幸福の時間は長いけれども死は免れないし、死んだらどこに行くか分からないということは変わりません。すなわち小土のままでは、まだ苦しみが続きます。輪廻から解脱しないかぎり、苦しみは無くならないということに気づいて、輪廻から解脱するための出家をする人たち、これを「中土」と言います。これは要するに出家者たち、声聞乘の人たちを指します。

しかし、自分ひとりの悟りを求めていたのでは、あるいは自分ひとりが苦しみから逃れられればそれで良いと考えているようでは、本当の苦しみを脱却することはできない。他の全ての人々が苦しんでいるのに、自分だけ救われたらそれで良いと考えることはできなくて、全ての人の幸せ、つまり輪廻からの解脱へと導かなければならない。そのため仏道を修行するのだという誓いを立てないではいられない。そのような誓いを立てた人を「菩薩」といいます。これが「大土」と呼ばれます。この小土・中土・大土で「三土の道次第」と言うこともあります。これは先ほど申しましたようにアティシヤが伝えたものですが、その弟子のドムトゥンという人からこれを受け継ぐカダム派という宗派が成立します。その弟子にポトワ、シャラワといった人たちが続きます。しかしながらその伝承はこれだけにとどまらず、アティシヤには他にも何人かの弟子がいて、それぞれにそれぞれの機会に教えられたことが伝承されていきました。すなわち、伝承は枝分かれするのです。枝分かれしたものがどんどん伝わっていき、中には途中で消えて途絶えてしまうものもあります。ツォンカパはそういったものを自分の中に、全てと本当に言えるかどうかは微妙ですが、主要なものを全て自分の中に伝承した、と考えております。

『菩提道次第大論』というのは、道次第の中でどのように位置づけられるかということですが、これは長尾雅人先生の言葉を借りれば、ツォンカパの立宗宣言であります。四五歳、結構遅咲きかもしれませんが。この時にツォンカパ独自の思想を広く世に問うたわけです。ここにはタイトルにも表れているように、先ほど申しましたカダム派の伝統

の道次第として書かれているわけですね。その中にそれまでのカダム派の思想を全部集大成したおかげで、ツォンカパ以降は道次第といえはツォンカパの『菩提道次第大論』を指すことになって、それ以前のカダム派の文献は廃れてしまっており残ってなかったのですね。それが二〇〇〇年代に入っている発見されてたくさん出版されるようになるんですが、その話は今日はいたしません。

歴史の中では、ツォンカパ以降は道次第といえはツォンカパの著作を指すようになってまいります。この中でツォンカパは道次第の利点というのを次のように述べております。仏説の全てを取捨選択することなく、全てそれぞれの道・段階の教えとして位置づけることができる、そういう思想であるということです。どれが良いどれが悪い、あるいはどれが上どれが下かと言うと、それはお釈迦様が説いた仏法のいずれかを捨て去ることになる。これは大罪である。ところが道次第思想の中では全てがそれぞれに意味が与えられて、それぞれの段階に配置されるので、どの仏説についても捨てるところがない、つまり仏説を誹謗するという大罪を犯すことがない。さらに、それぞれの段階に配置するというのは、それぞれに意味があってその段階に配置されるので、その仏説の真意を容易に理解できるようになる。「だからこの段階でこういったことを説いた」と常に仏説の真意を論理的に説明できるように。これが道次第思想の利点であると言っております。

さらに、おそらくこれはツォンカパ独自の主張であるかと思うのですが、普通道次第と言いますとひとりの人がだんだん段階を上がって悟りに向かっていくようなものを思い浮かべますね。ところがツォンカパはそうではない。これはまず最初に大士として菩提心を起こす、つまり全ての人を救うために仏道の学習・修行をするという誓いを起こした人がすべての者を救うためには、それぞれの教説が誰に適切なのか、どのような人に適切なのか、その意義を知っていなければいけない。その意義を知るための設計図・見取り図が道次第なのだと言います。つまり仏教に目覚めたひとりの修行者が順々に辿っていくのではなくて、仏説を体系化することによってその仏説の意味を理解する。

理解することによって菩薩が全ての衆生に適切な教えを授けることができる、そういう意義があるのだと主張します。おそらくこれは聖文殊の教えに由来するのであるかと私は想定していますが、このところは「そうだろう」と推定しているだけできちんとした根拠があるわけではありません。それはまた後ほど申し上げます。

『菩提道次第大論』のあとがきの部分に、どついう資料を基にしながらツォンカパはこの著作をまとめたのかというところが書かれております。それによりますと、最初に道次第の伝承というのがあります。先ほど申しましたように、アティシヤの弟子が何人かいて、そこからそれぞれ別々の伝承が伝わってまいります。そのうちのいくつかをツォンカパはまず二つほどナムカ・ギェルツェンという人に聞き、もう二つほどの伝承をチュキヤブ・サンポという師匠に聴聞をしています。それからもう一つ大事な流れといいますか、道次第の流れとはまた別にアティシヤの主著である『菩提道灯論』（菩提への道を照らす灯明）というタイトルの著作があります。これはアティシヤを招聘した西チベット王に請われて説いた書物です。この著作の伝承もありますが、ツォンカパはこれについて三士の定義の箇所のみを採用した、逆に言えば、定義のところしか採用していないというように述べております。より重視したのは、ドルンパの教説次第の構造を、『教説次第大論』という著作があるのですが、その構造を基礎にし、そこに多くの道次第のいろんな祖師の重要なことばを集めて、道の構成要素の各部分に配置し、実践しやすく混乱のない順序で提示している、と書いてあります。すなわち、道次第の基本的原典である『菩提道灯論』よりも、『教説次第大論』からの影響が大きいことが分かります。

このことを、ツォンカパの伝記の中で確認してみましょう。ラマ・ウマバと別れて二年後の一三九四年、三八歳の頃ナムカ・ギェルツェンから道次第を聴聞します。そして次の年一三九五年、ニェルというところに戻って、ドルンパの『教説次第大論』を初めて読みます。実は教説次第についても伝承があったのですが、ごく初期のうちにそれが途絶えてしまいます。書物でしか残っておらず、しかもそれもそこまで広まっていなかったため、ツォンカパは読ん

でいなかったんですね。たまたまニエルのお寺に『教説次第大論』が来たということで、それを拝読しにいきました。供養をしてそれを読んで、そしてそこに書かれているそれぞれの段階が、自分が考えていたものとはほぼ一致すると確信します。それが教説一切とその実践の仕方について誤りのない確信、大維把にいえばそうですが、より詳しくいえば全ての所化それぞれの能力に応じて導くことができる道次第。これは先ほど申しましたように、ツォンカバの道次第についての解釈の独自な点をここに読み取ったわけです。同年一三九四年と一三九五年にナムカ・ギェルツェンとチュキヤブ・サンポから、集中して道次第の伝承を聴聞し、かつその間にドルンパの『教説次第大論』を読んでいる。このあたりで『菩提道次第大論』の素材がほぼ揃ったのでしよう。

そして、その後一三九六年に先ほど申しました、ブツパーリタの夢を見る御籠修行があります。こちらで中観思想の奥義を体得します。

一方、レンダワとの関係は一四〇〇年レンダワを夏安居に迎え、そこでツォンカバはレンダワといろいろな議論をします。しかし、どうも私の感触としてはその議論は意見が一致しなかったのではないか、と思います。といますのは、ここで次の年まで、一年間レンダワと一緒にいましたが、一四〇一年にレンダワは中央チベットのツァンに戻っていきます。それ以後ツォンカバの伝記の中にレンダワへの言及がありません。ということは、これまで結構頻繁に会って話をしていたり、書簡を出したりしていたのに、ここでレンダワの名前が急になくなってしまつのは何か非常に意味深い、単にそれだけのことから二人は訣別したのではないか、という私の空想が生まれてくるわけです。それでレンダワと別れ御籠修行を始めた時に、アティシャと弟子たちのヴィジョン、夢を見るんですね。これはまた後でもう一回詳しく申し上げます。そしてそれを見終わった後に『菩提道次第大論』を執筆します。こういった流れで最初の主著が書かれていくわけです。

アティシャのヴィジョンとはどういうことかと言うと、アティシャの弟子のドムトン、その弟子のポトワ、その弟

子のシヤラワなどの祖師たちの姿が現れてきて、そして現れただけでなく、彼らはツォンカパに向かっているという法を説きます。そういったヴィジョンが一か月ほど続いたと書かれています。ずっと夢を見てたというよりは毎晩見る夢の中で現れる、あるいは夢とも瞑想修行ともつかないような状態の中で現れてくる、というようなことだと考えておけばよいでしょう。そして最後に三人の弟子が皆アティシヤの中に溶け込んで消えていった。そしてそのアティシヤがツォンカパのところに来てツォンカパの頭の上に手を置いて、「一切衆生を救うために悟りを目指すためのパートナーに私になってあげましょう。だから頑張って仏道を広めてください」と言っただけです。加持をするわけです。そして消えていった。これがおそらくは『菩提道次第大論』を書くことになる根本的な体験がここで成立したということの象徴的なヴィジョンであったのだらうと思います。これは表面的に考えますとカダム派の伝承が全てツォンカパに伝えられたことを示しているというふうにも言えますが、一方で先ほどちょっと述べたレンダワ宛の書簡ですね。聖文殊の教えの中にも道次第に関連するものが非常に詳しく書かれています。それとの関係、あるいは『教説次第大論』との関係はどのようになっているのか、ということはこのヴィジョンだけでは読み取れないわけです。

そこで先ほど最初一三九〇年から一三九二年の間に一緒に修行したラマ・ウマバに登場してもらいます。ラマ・ウマバに宛ててツォンカパは書簡を出しています。もう東チベットに帰ってしまっただけではありません。そして聖文殊の教え、つまりレンダワへの手紙に書いていた「道の三要素」という内容があります。一つは輪廻から出離したいという心が大事である。次に全ての衆生を救うために仏道を実践しようという菩提心が大事である、これが二つ目。そして、そのためには空と縁起に関する正しい見解を得る必要がある、というこの三つの要素です。これとカダム派に由来する道次第とが同一のものであるということ、さらに道の三要素というのは種のようなものであり、カダム派の道次第はそれを詳しく注釈したものである、ということがわかったとあります。そしてこの道次第の全てにおいてこの道の三要素というのは成立しているが、道の三要素だけを説いたのでは人々に誤解を与えかねず、増益や損減の

大きな原因になり、利益は少なく過失が大きくなると理解し、著作としては道次第を著すことを決めたといいことで書いてあります。道の三要素については講義はしないということも、道の三要素に書かれているのは、弟子に宛てた一通の手紙だけですね。あとは道の三要素について書いているものはないのです。レンダワに出した聖文殊の教誡の報告には出てきませんが、教えとして自分が教えていることとしては、弟子に宛てた一通の手紙、これは実は有名な著作で現在でもゲルク派のダライラマ法王をはじめとして皆この著作を取り上げて講義をしますが、ツォンカパはそれはまずいと考えたらしく、道次第のきちんとした全体像を示さなければならぬ、と考えたと思われます。ですが、とにかく聖文殊の思想とカダム派の道次第は本質的に一致している、あるいは道次第の核心部分は道の三要素であり、別のものではないと気付いたということが、ラマ・ウマパへの手紙で報告されております。

もう一つ、『教説次第大論』ですね。これをツォンカパは最初に読んだ時に、その構成が自分の考えている道次第とほとんど一致しているということに感銘を受けます。そして、実際のところ『教説次第大論』の構成と『菩提道次第大論』の構成を比べてみると若干異なりますが、構成はほぼ一致しています。もちろん内容にちょっと違いはありますが、結局のところ先ほどの『菩提道次第大論』のあとがきに書かれていたように、『菩提道次第大論』は全体の構成は『教説次第大論』に則りながらその中の個々の内容に道次第の祖師らの言葉を散りばめていくという構成になった、と考えられます。これらが一体のものとしてツォンカパに道次第の理解が成立したというのが先ほどのアティシャと弟子たちのヴィジョンではなかったか、と考えております。

4 密教思想の形成過程の検討

次は密教の話です。密教というのは顕教と全然別のものでいう訳ではありません。顕教で究めた中観思想の空の理解、これは頭で考えたただけなので実際に空というものを自分の身体で実現するための修行の方法が密教である、とツ

オンカバは位置づけています。また密教の根本思想は中観思想の空思想であるということで新たな展開はありませんが、問題は実践の仕方にツオンカバ独自の考え方が入ってきます。これもやはり階段になっておりまして、大きく分けると最初に灌頂という段階があり、二次第といわれる生起次第と究竟次第があります。その究竟次第が五次第に分かれていくこととなります。灌頂というのは入門儀礼、イニシエーションです。密教の修行をしてよいというイニシエーションの儀式です。弟子は「自分はそれを頑張って修行します」と誓いを立て、師匠はそれを許可し導き入れ、最初の手ほどきをします。この儀式が灌頂となります。そしてそれが終わった後、今度は生起次第という段階に入ります。これはみなさんご存じの曼荼羅ですね、あれは仏の世界、宮殿ですが、これを観想の中で全て組み立てていく、というイメージトレーニングです。そしてその中の中心の本尊に自らがなる本尊瑜伽というイメージトレーニングをする修行です。それが自由自在にできるようになったら究竟次第という最後の段階です、先ほどの生起次第では、イメージトレーニングで自分が仏になっていると観想しましたが、究竟次第では、実際に自分自身を仏に変容させるための瞑想修行が行われます。これは自分の中に流れている、中国で言うところの気のようなもの、生命エネルギーですね。これをチベット語でルン、漢字では風(ふう)、「かぜ」ではなく「ふう」、地水火風の「風」です。これが体の中に流れていて、それを操作することによって死と近似したプロセスを自ら内的に引き起こし、簡単に言ってしまうえば死ぬ瞬間に悟りを得るわけです。これを説明するのに一時間くらいかかってしまいますので、それはここでは措いておきます。そこに究竟次第における段階が五次第、五つの段階があります。これは菩提道次第、道次第のいわば延長にあるものです。

その五次第についてのツオンカバの密教思想がどこで完成するかということですが、普通『菩提道次第大論』に続いて一四〇五年に書かれた『真言道次第大論』というのがあります。要するに前者で顕教を完成し、その先の密教の諸段階が後者に示される、ということになります。この『真言道次第大論』はこれまでツオンカバの密教思想を研究

する際に結構使われていたのですが、実はこれは主著ではないんですね。少なくともゲルク派の伝統の中でツォンカパの密教思想の主著と言われるものは、チャンドラキールティ作の『秘密集会タントラ根本タントラ広註・灯作明』、きわめて難解なものでそれに対する複註を一四一四年にツォンカパが書きます。亡くなる五年前です。これともう一つ『五次第を明らかにする灯明』という著作、これは五次第に焦点を当てて書いた著作です。ですから、『灯作明』の複註というのは注釈形式で書かれ、『五次第を明らかにする灯明』は独立した形式で書かれています。ツォンカパの密教に関する主著はこの二つであるとされています。

これらは年代を見ると一四一四年、一四一一年ですが、先ほど言いましたナーローの六法のヴィジョンを見るのが一四〇九年なんですね。五三歳の時、日付まで分かっています。一二月三日にアティシヤの前でかつて文殊と弥勒が議論した際に、そこにあった川の水で満たされた壺を、文殊金剛つまり聖文殊がツォンカパの頭に授けようとす夢を見ます。次の日一二月四日、プトウンの姿をしたラマが『秘密集会タントラ』根本タントラの経帙をツォンカパに授け、「これを自分のものにしなさい」と言いました。ここで前日の夢の意味がこれだったと分かったと言っています。川の水というのは、仏教あるいは密教の流れであり、壺の水は、そのエッセンス。それが『秘密集会タントラ』根本タントラだということでしょう。そのエッセンスは、聖文殊からプトウンに渡され、さらにこれをツォンカパは受け取る訳です。一二月五日、マルパのナーローの六法の核心についての大雑把な理解を得たとあります。そして一二月六日、これら全て夢の中です。ナーローの六法について、それが『秘密集会タントラ』と聖者父子の意図に基づいた教えと同じものであるという確信を強く抱くようになったとあります。聖者父子というのは、ここでは密教のナーガルジュナ、アーリヤデーヴァのことでしょう。そして一二月七日、覚醒状態と夢の状態とそれらが混合した状態についての非常に強い確信を得た。これはチャクラサンヴァラ尊の法、教えがチベットにおいて衰滅しそうなったのをツォンカパが明らかにしたことを意味する、という夢を見ます。実際にここはもうちょっと象徴的です。

死にそんな人に食事を与えるという夢を見るんですね。これは何かというと、死にそんな人はチャクラサンヴァラの教えがなくなりそうになっているチベットで、それに対して食べ物を与えるというのはツォンカパがその教えを明らかにする、という象徴的な意味があるとケードウプジェはツォンカパの『秘密の伝記』に書いています。

ここで、このヴィジョンを見る前のツォンカパの密教思想の由来を簡単に申し上げておきます。ツォンカパは若い頃は『時輪タントラ』の講義をよく聴いておりました。レンダワからは『秘密集会タントラ』の五次第の講義を聴いていました。先ほど出てきたプトゥンについては、一三九二年、キュンボレーバというプトゥンがいたお寺の高僧からプトゥンに伝わった教えを全て授かります。このプトゥンというのはチベットの密教すべてを体系化した一切智者と呼ばれる人です。一四〇一年、ディグン法王、ディグンというのはカギユ派の一派にディグン派というのがあるんですね。そのディグン法王からカギユ派のナーローの六法、カギユ派というのはマルバが立てた宗派ですが、それとマハームドラーの法などを聴聞します。マハームドラーは少し難しいので措いておきますが、これもカギユ派の根本思想の一つです。ナーローの六法は、インドの密教行者ティローパからナーローパに伝わり、それがマルバに伝わってチベットに伝来した密教の修行方法です。(1) チャンダーリーの火、チベット語ではトウンモと言いますが、へその下あたりに神経を集中して、ここに熱を発生させるという技法です。それから(2) 幻身というのは、カギユ派とツォンカパでは解釈が異なります。カギユ派では鏡に映った像のようなもの、それに対してツォンカパは五次第の中で最終的な仏身になるときの色身の基になるようなものとして重要視しています。それから(3) 夢の修行、夢の中で修行すること。それから(4) 中有というのは人が死んでから次の転生に至るまでの間の期間を中有と言いますが、中有の中でも修行をします。そして(5) 光明というのは、空性という真理は光明として現れるので、この光明を空であると理解できれば悟りを得ることができるわけですが、そういう光明についての修行法です。そして今生で悟りを開くことができなかつたので来世に上手く転生しなければいけないので、自分の意識を来世に意図的に移す

ことができる、これを（6）ポワと言います。これは来世ですけれども、今生で、元氣だけでも死んだ人に意識を移して、その人に自分の修行を続けてもらう、これをトンジユクと言います。カギユ派のナーローの六法は、非常に原始的なものです。しかし、ツォンカパの夢の中でこの本質を究めると、プトウンから伝わった『秘密集会タントラ』の根本タントラの意味をまず理解する、まず前半ですね。後半ではナーローの六法についての深い意味を理解するようにになると。そしてそれが、秘密集会とその聖者流の解釈と一致した教えであることについての確信を先ほどのヴィジョン、夢の中で得ます。聖者流とは、中観思想と一緒にナーガルジュナ、アーリヤデーヴァ、チャンドラキールティといった中観思想の祖師と同じ人が長生きして書いたと言われますが、実際には別の、密教のナーガルジュナ、密教のアーリヤデーヴァ、密教のチャンドラキールティの著作というのが残っております。その『秘密集会タントラ』の解釈とナーローの六法が同じものだという理解ですね。これが結合、融合するという経験が得られます。これが実はツォンカパが最後に書いた密教の主著を執筆する動機になっているのではないかと思えます。

おわりに

以上のように駆け足でしたが、ツォンカパの中観思想、道次第思想、密教思想が形成されていく過程は、かなりの程度まで分かるようになっております。そしてその全ての最後に、ヴィジョン・夢が現れることが共通している。こういうことについて中観思想については結構分かっておりました。また道次第についてもクンサン・チジョンさんの博士論文でかなり分かってまいりました。ただし原典に基づいた研究は十分でなく、これからやるべきことは残っておりますが、今日の私の話よりは詳しいことが分かっております。密教については全く分かっておりません。私は密教の研究者ではないので、「これは誰かがやってくれるかな」と思っただけですが、これに注目する人がいないので、今日ここで皆さまにお話しさせていただいて、密教を研究する方がこういう視点からツォンカパの密教思想と

いつものを読んでいただければ、とそういう願いを込めて今日のお話をさせていただきました。
と言うことで、以上が私のツォンカパの研究の色々と辿り着いた大雑把な、こつやってみると極めて大雑把で実際にはもっと細かい議論がありますが、短い間に全てをお話することはできないので、こういう形でお話しさせていただきました。人名や書名なども、あまりご説明できず、分かりづらかったかと存じますが、ご寛恕下さいませようお願い申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

参考資料

石濱裕美子・福田洋一『聖ツォンカパ伝』大東出版社、二〇〇八年

更藏切主（クンサン・チジョン）『菩提道次第大論』におけるカダム派思想の研究 道次第を中心として 『博士論文、大谷

大学、二〇二〇年

福田洋一『ツォンカパ中觀思想の研究』大東出版社、二〇一八年

福田洋一・拉毛卓瑪（ラモジヨマ）『ツォンカパ伝における年次と四季の確定』『佛教學セミナー』第一〇九号、二〇一九年、一

BUDDHIST SEMINAR

CONTENTS

Article

- The Structure of the *Shifenlu xingshichao* and Its Intention:
As an Attempt to Compile Passages Related
to All Things in NatureTOTSUGU Kensho 1

Final Lecture

- On the Process of the Formation
of Tsong kha pa's ThoughtFUKUDA Yōichi 33

* * * * *

- Reports 54

* * * * *

Articles

- From Aśvaghosa to Vasubandhu: Vasubandhu's Views on the *Saddharmaviṃśatī*
and Aśvaghosa's Kāvya as seen in the *Vyākhyāyukti*
and the *Abhidharmakośa*UENO Makio, MATSUDA Kazunobu 51

- The Structural Interpretation of Chapter 5 of the *Pramāṇasamuccaya*
Based on Dar ma rin chen's CommentaryHATANO Kisho 30

- A Translation of the Story of an Angry Monk Who Became a Poisonous Snake
in the *Muktaka* of the *Mūlasarvāstivāda-vinaya*
- Part One: Two Clichés-KISHINO Ryohji 1

PUBLISHED BY
THE SOCIETY OF BUDDHIST STUDIES
OTANI UNIVERSITY
KYOTO JAPAN